きっと、恋に落ちる。

楓麻白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
きっと、恋に落ちる。

【Ｎコード】
Ｎ１９７６Ｔ

【作者名】
楓麻白

【あらすじ】
高校生活最後の今年。よりによって大嫌いなあいつに気に入られた私。だいたいあんたは教師で、私はその生徒だってば！強引で強気な先生。これからの学校生活、どうなちゃうの？
でもその先生は…。
高校３年生の永岡未緒と、新任教師、浅野陽透のラブコメディー。

出会い

出会いは今年の４月。
あいつが新任教師としてこの学校に来たことから始まった。

髪の毛の色はこげ茶で襟足が少し長く、目は二重でまつ毛が長い。
鼻も通っていて、肌は色白だがほどほどに健康な色だ。
まぁ、世の中の一般の人風に言うのなら…。
そう、イケメンに属するタイプ。
そんな外見に見惚れる人はもちろん多く、女子から絶大な人気を誇っている。
担当教科は国語、うちのクラスの担任。
それから歳は２２歳、これは人気の理由の１つだ。
私たち高校３年生と４つしか離れていない。

４つしか離れていなかったら普通、生徒に舐められるものじゃない？
なのに、あいつは違って。女子だけでなく、男子にも慕われている。
クラスのみんなはあいつを信頼して、尊敬さえしている。

ただ１人、私を除いて。
私はあいつが嫌いだ。
大嫌いだ。

あいつが新任教師だからだ、とか。若いくせにみんなから信頼を得て、どんな技を使ってるかわからなくて信じられないから、とか。

口うるさいとか、課題が多いから。
とか、そういうことではなくて。

何が嫌なの、と聞かれると困ってしまうけど。
言葉にするのは難しいけれど、ダメなものはダメなんだ。
嫌い、と言うともしかしたらちょっと違うのかもしれない。
苦手なのだ。
最初見たときから、なんとなくだけど苦手意識が働いた。
ああいうタイプは女遊びとかしちゃってそうだし、生徒とかにも隠れて手、出してるような、そんなあくまでイメージだけど私の脳内にはそうインプットされてしまっている。

人を外見で判断してはいけないという。
そんなことがわからないほど幼い子供ではないし、そんな自分を戒める気持ちもないわけではない。
ただ、本能があいつを得意としていない、そんな気がして。
だから、苦手じゃなく、嫌いという言葉を当てはめているのかもしれない。

とりあえず、いろいろと言い訳じみたこともぐちゃぐちゃ連ねてみたけれど、言いたいことはこれだけだ。
私はあいつが嫌いだ。

＊

「ねぇねぇ、未緒（ミオ）。次国語だよ！浅野先生だよ！テンション上がるね！」

友達の1人である、祐子（ユウコ）がテンションが上がってるせいか、いつもより少し高めの声で話かけてくる。

「相変わらずあいつのこと好きだね、祐子。」

「もー！未緒はいつも“あいつ”って言うっ！」

「だってさ、好きじゃないんだもん。」

「何で何で？あんなにかっこよくて、いい先生はなかなかいないよ？」

「かっこいいっていうのはあえて否定はしないけどね。どこが“いい”先生なの。」

「ん？全て？」

何で語尾がクエスチョンなの。

と、心の中で悪態をつきながら祐子の話しをスルーする。

「あ、ちょっと！またそうやって浅野先生の話になると勝手に終わらせる！」

「だから、好きじゃないんだってば。」

「はぁ…、浅野先生の良さがわからないなんて可哀そう、未緒。」

憐れんだ目で見てくる祐子。
わからなくて結構。
私はそんな表情で返し、席を立ちロッカーへ向かう。
それに…。
気になる人、いるんだもん。
好きでもないあいつのことなんて、気になるわけないじゃん。

＊

国語の時間。
あいつがドアを開けて入ってくる。その姿を目で追う女子たち。
毎時間同じことをやってて飽きないのかねぇ。で、今日もいつも通りなら…。

「あーはい、前の時間の続きからね。じゃあ、今日は２３日だから３５番永岡。読んで、１６行目から。」

はぁ。
私はため息をつきながら、ゆっくりと席から立ち上がる。
本名、永岡未緒（ナガオカミオ）。　出席番号、３５番。

今日の日付と何の関わりもない番号。
いや“今日”と、限定するのは誤りがある。だいたい、３５日なんて日付は存在しない。

なのに、毎回あいつの授業では必ず当たるのだ。
というか、それに気付いている人は誰もいない。
誰かしら気付いてくれているなら、弁護人としてついて来てもらって抗議しようとも思う。
けど、1人だったらどうせ言いくるめられて終わるに決まってる。
だったら、無駄に関わりたくない。
私は大人しく指定された場所から読み始める。

＊

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。と同時に何人かがばらばらと席から離れていく。
その中で、授業の片付けをしていたあいつがふと思い出したように言った。

「永岡、放課後俺んとこ来て。」

……何だろ。

特別宿題

「永岡、放課後俺んとこ来て。」

担任で国語科のあいつに授業が終わってすぐに言われた。

ホントは行きたくない。本気で行きたくない。
でも、後々何か言われると、それはそれで面倒臭いから。
仕方なく素直にあいつのところへ向かう。
何かしたかなぁ。
腕組みをしながら放課後の廊下をまっすぐ歩いていく。
今まで出来るだけ関わらないように、目立たないキャラ演じてたつもりなんだけどなぁ。
そうこうしているうちに国語科準備室に着いてしまった。
反対側の窓から見える夕焼けがやけにきれいでちょっとだけ腹立たしい。
はぁあ。大きなため息をついて。
それからドアノブに手をかけた。

「失礼しまぁす」

「何そのやる気のない“失礼します”。」

「自分から来いって言っておきながらいきなりそんなこと言いますか普通。」

「まぁ、いいけど。」

なんだそれ。
思ってたとおりの変人。
だいたい、来たくもないのにわざわざ来たこの場所で、どうやってやる気を発揮しろというんだ。

「で、用って何ですか。」

さっさとこの国語科準備室という名の奴のテリトリーと、そこで奴と2人きりというシチュエーションから抜け出したくて本題に入るよう促す。
でも、それを全く察さずにあいつはマイペースに口を開いた。

「永岡、最近の調子はどうなの。」

「いや、別に普通ですけど…。」

「ふぅん。」

自分で聞いときながら、何だその反応。
いらっとしてきている自分を宥めながら話しの続きを待つ。

「じゃあ、何か気になることは。」

「…特に。」

あると言えばあるけどさ。
あんたが毎回授業の度にあてるとか。

「へぇ、永岡って結構無関心で生きてんだ。」

…はぁ?!何なのこいつはっ!!
さっきから失礼過ぎ!

「ってか鈍感?」

そしてどんどん話しを進めるんじゃない!!

「…何がですか。」

「だから、鈍感なのかって聞いてんのね、俺は。」

「どこがそう見えるんですか。」

「誰も永岡が鈍感なんて言ってないじゃん。聞いてるだけ。」

「っ。」

未緒は気付かないうちに浅野のペースにはまっていた。

「ホントに気付くことないの？鈍感じゃなければ気付くと思うんだけど。」

「あー！！わかりましたよ、もう！１つだけあります！！」

未緒は半ばやけくそになって叫んだ。

「毎回国語の授業のとき必ず私、当たるんですけど！！」

「それ。」

「へ…？」

「だから、それ。」

「え、あの、自分から言っといてなんですけど、全然話しが見えてこないんですけど…。」

「だから、俺はその話しをしたかったわけ。」

お目当てのものが出てきて満足そうな浅野。

そんな浅野に対して、未緒は全く話しがわからないようで。

頭の上にはてなを浮かべている。

え、何。

先生わかってて当ててたの？

意図的に？

というか、なんて遠回りをさせてくれたんだ、こいつは。

「じゃあ、さっさと先生から言ってくれればよかったじゃないですか。」

こんな面倒臭いことしないで。　とか思っても口にはしない。

これ以上話しを散らせて遠回りはしたくない。

「そーゆー気分じゃなかったし。」

「……。で、それがどうしたんですか。」

「何でだと思う？」

「毎回あててていたことは否定しないんですね。」

「何でだと思う？」

私の言葉には答えず、何度も同じ言葉を繰り返す先生。

その感じに脱力感を覚え、肩を落とす。

「はぁ…、それを一番知りたいの、私ですよ。」

「だから、考えてみてって。」

「……、私のことき「宿題。」は、はぁ？！」

「だから、来週まで考えきて。宿題だから。」

そう言う先生の言葉は妙に有無を言わせない力を持っていた。
それを感じ取った私は、反論する気をなくして、仕方なく向きを変えてドアに手をかけた。

けど…。

「先生、来週まで考えるのめんどく「考えてくるだけ。そんなことも出来ないの、永岡？あ、今時の子は、考えることが出来ないっていうけど、本当なんだなぁー。へぇー、俺と４つしか変わらないのにびっくりだ。」

言いかけた言葉に被せられた言葉が右耳から私の頭の中を通り抜け。
そしてそれが怒り境界線を越えてしまうのに時間はかからなかった。

「誰がやらないって言いました？まだやりもしないことを出来ないって決め付けないでもらえますか？こんなの朝飯前ですから。絶対答えだして先生をぎゃふんと言わせてやりますから！！」

一気にそこまで言い、手にかけたドアノブを乱暴にひねり、勢いに任せ開けて閉めて廊下を全力で走り抜けた。

「朝飯前とか、ぎゃふんとか…。今時言わないだろ。」

未緒が去った後、浅野がそう言って笑っていたのをもちろん未緒は知る由もない。

宿題の答え合わせ

「来週まで考えてきて。宿題だから。」

先週の金曜日、あいつに一方的に押し付けられた宿題。
宿題が出されてから今日で6日目。
“絶対答え出してみせる”なんて言ったけど、ぶっちゃけわからない。
だいたい何でこんな宿題出されなきゃいけないの。

「あたしが何したって言うのよぉ。」

私はうなだれながら、机に突っ伏し、右脚だけ盛大に貧乏揺すりをしてみる。
午後の授業と授業の合間、こんなあからさまにイライラを態度で表しているのは流石に私だけなんじゃないだろうか。
そうしているうちに人の気配を感じ、不機嫌なままの顔を上げる。
と、祐子ともう一人の友達の嘉乃（カノ）が席の前に立っていた。
あら、2人お揃いで。

「どうしたの、未緒らしくないね。」

祐子とは違い、淡々とした口調のまま嘉乃は私に問いかける。
別段それに腹が立ったとかではなく、今週1週間溜まりに溜まった

感情が言葉に勢いを乗せてしまった。

「どうしたもこうしたもぉ…！」

そこまで言って口を結ぶ。
2人に言っても仕方がない…。
それにこれじゃあただの八つ当たりだ。
全く関係ない2人に八つ当たりそうになった自分にもイラッとする。
その先の言葉を続けない私を不思議に思ったのか、2人の頭の上にはは てなが浮かんでいた。

「ううん、何でもない。そしてごめんなさい。」

「何だ何だ？気になる感じ！」

「あ、いやホント何でもないんだ。」

「小野くんのこと？」

とりあえずこの話題を終わらせようとして言った言葉の後に、嘉乃から出てきた名前に動揺し一瞬体を小さく揺らした。
小野（オノ）くんとは、私の、その、気になっている人で…。
別に本人がこの場にいるとかじゃないんだけど、なぜか顔が熱っぽくなっていくのを感じる。
けど、すぐにまた眉間にしわがよる。

「その悩みならまだ幸せだよ…。ってか何で知ってるの。」
「まぁ、私たちには分からないから何とも言えない、けど…。」
「けど…？ってかスルー？」
「その未緒の悩みは、大好きな小野くんを勝ってしまうわけだ。」
「え…？」
「え、何々未緒って小野くんが好きなの？！」

話しの着眼点がワンテンポ遅れている祐子と、何で小野くんが好きだと知っているのかと聞いている私を無視して嘉乃は話しを先に進める。
というか、よくこんな高度なことが出来ますね、嘉乃さん。
ある意味尊敬します、はい。

「だから、いつもなら比較的小野くんのことで頭いっぱいなのに、今はそうじゃない。それって優先順位が上ってことだよね、小野くんより。」
「そ、そんな訳ないよ！」
「そう？じゃあ、小野くんのこと考えてたの？」
「…すみません考えてませんでした、全く。」

「ねぇねぇ、今なんのこと話してるの？」

相変わらず祐子は話しのテンポが合ってこないが、嘉乃はさっさとまとめに入る。

「まぁ、未緒が聞くなって言うなら聞かないけど。」

「あ、うん…。そうしてもらえるとありがたい。」

私の答えを聞くと嘉乃は祐子を連れ、自分たちの席へ戻っていった。
ははは、ホントにいい友だちだわ。
そうして私はもう一度机に顔を伏せた。
あぁもう、明日になんてならなきゃいいんだ…！！

＊

昨日の願いも空しく時間は正常に進み続け、宿題が出されてから1週間目を迎えてしまった。
私は国語科準備室の前に立ち尽くす。
先週と変わらず夕焼けがきれいなパターンですかこのやろう。
はぁ、太陽に悪態ついても何も変わらないんだよ、おバカな私。
少々自嘲気味なのも仕方がない。
あんだけのことを言っておきながら答えなんて出せていないのだから。

だって私、浅野先生じゃないし。
そうやってぶつぶつと文句を言って入るのを躊躇していると、中からドアがいきなり開いた。

「！」

「何してんの。早く入んなよ。」

先生はそう言うと、奥の自分の席に座った。
私はその様子を見て、仕方なく（仕方なくないけど）中に入りドアを閉めた。

「で、答えは見つかった？」

先生は自分の前まで来た私に間髪入れずに聞き始めた。

「……まぁ一応。」

「その間が気になるけど。どーぞ、言ってみて。」

偉そうなのが若干気に触るけど。
ってかかなり。
座り方だってそうだ。
脚を組んで腕も組んで、おまけに若干背もたれに背中を預けすぎな

気がするんだ。
仮にも話し聞くって態度じゃないぞ。
心の中で先生にひとつ忠告してから気を取り直して話し始める。

「えっと、先生はホントは国語が好きじゃなくて、だから気の向かないことしてるから、少しでもうっぷんを晴らそうとたまたまターゲットにされた私にそ「すごい妄想が広がってる。」

…。
まだ言い終わってないんですけど。
さっきの体制から全く動かず、口元だけで先生は私の話しを上から被せてくる。
みんなこんな先生を見ても見惚れるんだろうか。
私は全くです。

「じゃあ、あれだ。いつも国語４時間目だからお腹空いてイライ「どっから来るの、その考え。」

頭の中からですよ、私の。
てか先週といい、つい数分前といい、最後まで言わせろぉ！
段々本格的にムカついてきた私は、左の手を握り、その握りこぶしに思いっきり力を込めることでどうにか自分を抑える。

「あー、じゃあこれで最後です。先生は私のことが生理的に受け入れられない。」

私が半ばやけくそに言ったこの言葉に先生の眉が一瞬動いた、気がした。

「…つまり？」

「先生は私のことが嫌いなんですね。」

私が最後まで言うのを口を挟まず聞いていた先生は、組んでいた脚と腕を解いて頭を掻いて、おもいっきりあからさまなため息をついた。

え、何。

何かまずいことでも言った？

「な、何ですか。」

「何でそっちに転ぶかなぁ。」

「そっち？転ぶ？何のことですか？」

先生は机に肘をついて不満げな顔をした。

動き出した歯車

先生は机に肘をついて不満げな顔をした。

え、え？

何その表情。

何で不満そうなのよ？！

先生の不満げな表情の意味が分からず私は少し困惑する。

「……だから。」

いろいろと考えていたからか、先生の声が小さかったからか、語尾のところしか聞き取れなかった。

今何て…？

「え、よく聞こえない…。」

私がそう言うと先生は私を上目で見上げるようにしながら、とんでもないことを言った。

「好きだから。」

「え、え？！」

まさか過ぎる言葉に私は驚きを隠せなかった。
その様子を見て先生は意地悪そうに笑みを浮かべながら席を立ち上がった。
その表情の変わりようはどういうこと?!
ってか、好き?
…好き?!
あ。
すみません、先生。
私“好き”って言葉にちょっと戸惑いましたけど、ちゃんと意味分かりました!!

「あ、先生、ホントは生徒が大好きなんですね!」

私がなるほど、と言わんばかりにそう言うと、先生はまた不機嫌な表情に戻った。
あら?
眉間にしわがよっちゃいましたよ、先生。

「わざと言ってんの?それ。」

「わざとじゃないですよ。ほら、好きって色んなのあるじゃないですか?」

「…そーゆーのじゃなくて。」

とは、どういうことだ。
もうホントに、この人国語の教師だよね。
毎回毎回分かりづらいよ。

「じゃなくて？」

ここで促したことを後で後悔することになるとは、全く思ってもいなくて。
先生の答えをあまりにも無防備に待ちすぎた。

「イイことしたくなる、好きの方。」

「い゛！イイことって何なんですか？！」

刺激の強すぎる言い回しに急激に顔が熱くなるのを感じた。
おまけにホントに急激に血が回ったのか少し目眩がした。
え、夢ですか夢ですよね寧ろ今この瞬間覚めてください起きてちょうだい私！！！

「じょ、冗談はやめてください！」

この悪夢から抜け出すための糸口を求めるように先生に言う。
けれど夢であってほしいと願いながらも、多分これは覚めることも

起きることもない現実であってリアルだと分かっていて、それからこれも多分本能的に感じ取った身の危険を回避するために私は先生の顔を出来るだけ視界に入れないように下を見たまま、少し後ずさる。
それが引き金だったかのように先生も間を縮めるように歩きだす。

「俺…、」

わざとらしく間を空けて言う先生。
そういう言い方がいやらしいのよー！
そしてこの国語科準備室はそんなに広くないのであっという間に2人の間はつまっていき、私はとうとう壁に背がついてしまった。
おっと…。

「本気だけど。」

おっとー！！！
その言葉にびくっと体が震えた。
だって何かいつもより声が少し低いし、ってか距離近いしぃー！！
壁に背中がついてしまった私とそれをつめてきた先生の距離は1メートル無い位。
どう考えても先生と生徒の距離感じゃない。
おかしい、おかしすぎる。

「は、離れてください！ちょっと近すぎます！！」

「ふっ。意識してんの？永岡。」

「は、はぁっ！？してませんよ！だ、だいたい信じてませんし！」

「…ふぅん。じゃあ本気だって証拠を見せれば信じんの？」

信じるもなにも、それ以前の問題で。
何で「なーんちゃって。からかってみただけ。」って言わないの？
ちょっと生意気な生徒相手に何むきになってんのよ先生。

「しょ、証拠？あ、あぁ、見せられるもんならみせてくださいよ。」

って、何挑発してんの私ー！！
あほあほあほー！！！
負けず嫌いな性格が裏目に出過ぎちゃったにも程があるでしょ！
私が自分を責めていたところで、下げている頭の少し上のほうでふ、
と笑う声が聞こえた。

「いいよ、そっちから了解が出たなら好都合だし。」

ちょっと。
この人もどこまで負けず嫌いなの。
私は恐る恐る目線を上げる。
と、そこには挑発的な笑みを浮かべた先生がいた。

その表情はどこか色気があって、今まで見たことのない、そう、多分今の先生は“先生”じゃない。
“男”だ。
そして先生は目で私を捉えると髪を一束掴み、それにキスをした。

「！！」

私はあまりのことに言葉を発することが出来なかったが、

「これが証拠。」

と意地悪く先生が言った一言で我に帰った。

「い、いやー！！」

私は馬鹿デカイ声で叫び、あらん限りの力で先生のことを突き飛ばして、国語科準備室から飛び出した。

「スゲー馬鹿力…。」

出て行った未緒を呆然と見送って浅野はそう言った。

＊

私は走ったまま教室に入り、自分の鞄を掴んですぐさま下駄箱で靴を履きかえて、校門を出た。
そしてしばらく走ってからようやくペースを緩め、立ち止まった。
何だ今の。
何が起こったのかさっぱり分からない。
私はあいつに無理矢理押し付けられた変な宿題を答えに行った、だけ。
それなのに何であーゆー展開になるわけ?!
ぐるぐると今までの状況を思い出す。

「もー!!何でなのよー!!!!」

「何が“何で”?」

考えすぎて思わず出た独り言に返事がついてきた。
大きく体を振るわせて声のした後ろを振り向いた。
そこにいた声の主は、クラスメイト兼私の好きな人である小野くんだった。

「小野くん…?!」

「永岡今帰り？」

「あ、うん。小野くんも？」

「うん、今日は部活が短縮だったんだ。」

そう言ってちょっといたずらっぽく笑う。
かわいい…。
小野くんは体の線も細くはないし、寧ろテニスをやっている分ある程度筋肉はついてるから中性的なそういうのではないけれど。
そう分かっているのに思わず浮かんでくる彼へのその印象はやっぱり特別な感情が故なのだろうか。

「ねぇ永岡、よければ一緒に帰ろうよ。家同じ方向だよね。」

「え！いいよ！」

小野くんからの突然の誘いに驚きながらも、喜びを隠せない。
自然に頬の筋肉が緩んでいくのがわかる。
え、今日っていい日じゃない？

「じゃあ行こっか。」

「うん！」

予想外の展開

「じゃあ行こっか。」

小野くんに誘われて急遽一緒に帰ることになり、待ってくれている小野くんの横に並び歩き出す。
こんなに近くで話したことってないなぁ。
近くで見ても、やっぱり男らしい顔つきしてる。
でも、男臭さは感じさせないんだよね、小野くんって。

「永岡っていつももう少し帰るの早くない？」

「んー、そうかも…。」

「今日は何かあったの？用事とか。」

「…まぁ、あったって言えば、あったかな。」

幸せな気分に浸りすぎて忘れていたが、話しの流れでついさっきの出来事が蘇ってくる。

「……。」

横に小野くんがいる事も忘れて無言になった。

今日は純粋にいい日、だったわけじゃなかった。

「…？さっきも思ったんだけど、永岡今日どうしたの？」

「あ、べ、別にどうもしてないよ？」

「ふーん、ならいいんだけどさ。」

いかんいかん、せっかく小野くんと帰れる滅多にないチャンスなのに、あいつの事を考えるなんて。
どうにかしてこの感情が落ち着かなくなる話題から話しを逸らさねばと思い、思いを巡らす。
えーとえーと。
……あ。

「あ、そういえばそろそろ体育祭だよね。」

「ん、あぁ。あれだけだぜ、俺が活躍出来んのは。」

「えー、そんなことないでしょ。」

小野くんは苦笑いでそう言った。
でも右手の親指を突きたてながら自信満々で付け足した。

「でも体育祭の主役は誰にも渡さないけどな。」

カッコイイ…。
ぶっちゃけ冷静な話しをすれば、体育祭の主役って何なのかってなるけど。
けれどもそんなのは今の私たちには関係なくて。
小野くんは自信を持ってそう言うし、私はそれをカッコイイと思ってるのだから。
私たちはまだ高校生だ。
ちょっと位馬鹿なことも多めに見てほしい。

「私はダメだなぁ、走るのとかニガテ。友達の応援ばっかり。」

今度は私が首を横に振りながら苦笑いでそう言う。
すると小野くんは私の言葉に対して返事のような、そうでないような言葉を返してきた。

「あ、マジで？じゃあ、俺の応援頼んじゃおうかな。」

「っえ？！」

今、口に飲み物を含んでいたら確実に噴出していただろう。
それだけ私にとって彼のその発言は驚くべきものだった。
ぇ、え？！
今何て言った？！
“俺の応援頼んじゃおうかな。”？！

え、あ、あれ？

「なーんて、永岡がいいならだけど。」

「あ、えと…。」

「俺は永岡に応援してもらえたらやる気倍増だなぁー？」

そう言って小野くんは私の方をチラリと見る。
２０センチ位上から私を見る小野くんの表情には断られるという選択肢を、はなから用意していないかのような自信が見受けられた。
それが妙に緊張感を引っ張り出してきて。
返事をするのにちょっと勇気を要した。

「え、えと。私なんかの応援でいいなら…。」

「マジで？！やったっ！じゃあよろしくな！」

「あ、うん、じゃあ、応援頑張るね…！」

私にとって大切な口約束が終わる頃、気がつけば私の家の前に着いていた。
自然に脚を止めると、小野くんも数歩先で同じように止まった。

「お、もう、永岡ん家か。じゃあ、また明日な！」

「あ、うん、バイバイ。」

軽く言葉を交わして、小野くんは走って行った。
私はそれをしばらく見送ってから急にスイッチが入ったかの様に玄関を開け、自分の部屋まで駆け込んでベッドに倒れこんだ。
…うそ。
うそうそうそ?!
つい3分前までのことがまだ本当のことという実感が湧かない。
でも、この心臓の鼓動の速さといい、頬が熱くなっていることといい、それがリアル感を出していた。
何かすごいドキドキしてる…。
私は発散の仕様も無いこの全身の高揚感から脚をじたばたさせる。
どうしよう、幸せ過ぎて死ぬかも…!!

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1976t/

きっと、恋に落ちる。

2011年6月13日12時42分発行